

社会主義，完成された社会主義および共産主義

井上 周八

- | | |
|--------------------------|-----------------------------|
| はじめに | トの独裁 |
| 1 社会主義・共産主義思想の系譜 | (2) プロレタリアートの独裁と民主主義 |
| (1) 空想的社会主義思想の出現まで | (3) 朝鮮革命における過渡期とプロレタリアートの独裁 |
| (2) マルクス主義の創始 | |
| 2 社会主義と共産主義について | 4 過渡期の社会主義社会と完成した社会主義社会 |
| 3 資本主義から共産主義の過渡期における諸問題 | おわりに |
| (1) 過渡期における階級闘争とプロレタリアート | |

はじめに

人民大衆は、長い間搾取と抑圧のない人間の自主性が完全に実現される理想の社会を求めてきた。この理想の社会は、はじめは宗教的に求められていたが、やがて、さまざまな思想や理念として観念的に求められ、ユートピア的社会主義をその最後として、ついに1840年代の中頃になって、科学的理論として出現した。

金日成主席はキリスト教について次のように述べている。

「全世界の人が平和でむつまじく暮らすことを願うキリスト教の精神と、人間の自主的な生き方を主張するわたしの思想とは、矛盾しないものとわたしは考えている。」（回顧録『世紀とともに』(1), 1992年4月)

社会主義・共産主義のめざす社会も、一般に宗教がめざすものと矛盾しない。

しかし、周知のように1980年代末に、東欧の社会主義諸国は、相次いで崩壊し、ソ連も1991年に崩壊し、旧ソ連は解体した。

これら一連の社会主義諸国の崩壊の原因については、本誌（第47巻1号）で考察したところであるが、本稿では社会主義と共産主義という場合、この二つの術語はどのような関係にあるのか、また過渡期の社会主義および完成した社会主義とはどのような社会であるのか、さらに過渡期とプロレタリアートの独裁の問題について、朝鮮革命では、それをどのようにマルクス・レーニン主義から学び、朝鮮に創造的に適用したかについてみることにする。

1 社会主義・共産主義思想の系譜

(1) 空想的社会主義思想の出現まで

社会主義・共産主義思想は、古くは原始キリスト教やモーゼの律法にも見られるという人もいる。この主張は、貧者を助けよ、富の濫用をやめよ、などの宗教的教えを、理想の社会を求める声として解釈したものであり、『新約聖書』のなかにも、神のまえに人間は平等であり、互いに愛し合って生活すべきである、という社会主義・共産主義思想がある、としている。

社会主義・共産主義思想と関連する思想として、しばしば言及されるのは、プラトン（紀元前427～347年）が50歳から60歳ごろにかけて完成したといわれる著作『国家』で展開した思想である。

彼は多くの人々が共同して住む共同住宅を「国家」とよび、この国に住むすべての人は「皆兄弟」であり、「各人は一人一人、国家に関する仕事のうち、自分の本性がそれにいちばんふさわしいものを一つだけえらばなければならない」として「能力による分業」を重視した。

またこの国家では「生活必需品は過不足なく」与えられる。ただ用心すべきは「富と貧」であり、「財産は人間を腐敗させる。誰一人として万やむをえない場合以外は、何一つ私有財産をもってはならない」とされている。

プラトンが『国家』で描いた理想の国家は、三つの階級から構成されている。すなわち支配者階級と補助者階級と生産者階級である。人びとは、それぞれ天賦の能力に応じて、治者（支配者階級）と戦士（補助者階級）と職人（生産者階級）に配置され、それぞれその職務を遂行して他の職務をおかしてはならないとされている。

プラトンはアテナイの名門貴族として生まれたが、戦争や政争および民衆の反抗の時代に生き、理想の国家を模索したのであり、彼の思想は今日の社会主義・共産主義思想と直接結びつく思想ではないが、古代の哲学者の理想とする社会がそこには描かれていたのである。

一部の人は、ローマ帝国支配下での無数の内乱、奴隷の叛乱のなかにも社会主義・共産主義思想をみることができる、としている。また14～5世紀の農民戦争などにも社会主義・共産主義思想がみられる、としている。このなかでとくに注目されたのが、私的所有を攻撃し、財産の共有を要求したトーマス・ミュンツァー（1490年ごろ～1525年）とその一派の主張であった。

彼はドイツの革命家であり、宗教改革と1525年の農民戦争の指導者であった。

マルクスは『ドイツ農民戦争』（1850年）のなかで、ミュンツァーの私的所有に対する攻撃と財産共有の要求は、それ以後、民衆動乱のたびに繰り返し現われ、やがて近代プロレタリア運動に合流したと述べている。

生産手段の共有に立脚する社会という着想が初めてあらわれたのは、トーマス・モア（1478～1535年）の著書『ユートピア』（1516年）であった。

大僧正の家に育ち、大法官も務めた上流階級出身の政治家であるトーマス・モアは、資本の原始的蓄積にもなう下層民の非惨な状態をその著作で描写し、一切の貧困の根本原因は私有財産制度にあるとし、財産の共有にもとづくユートピア的社会秩序を構想した。

この社会は、各40人の家族員と2人の奴隷からなる家族が単位となっている。そして54の州があり、1つの州は6,000の農場からなっている。公的事項は選挙による州の評議会と連邦議会が処理する。この社会は農業を基礎としており、毎年都市人口の一定数は農民と交替する。富は公有で、労働時間は1日6時間、一夫一婦制で、人びとの生活は質素でぜいたくを知らない。また奴隷はいつでも国を去ることが許されている。

このユートピア構想は、共産主義的な未来秩序を描写したものであったが、しかしなんらかの大衆的社会運動を反映したのではなく、イギリス資本主義の発生期における一思想家の洞察であった。

トーマス・モアのほかに、イタリアのトマソ・カムパネルラ（1568～1639年）も『太陽の町』で空想的共産主義秩序についての彼の夢を書きあげている。

彼は単なる書齋の学者ではなかった。当時イタリアはスペインの領有下にあり、彼はスペインの圧迫に反対し、イタリアの解放をめざして秘密団体の指導者となったが、裏切り行為によって27年の獄中生活を送った。この監獄生活のなかから生まれたのが『太陽の町』である。

彼は、私有財産も社会的不平等も抑圧もない社会こそ、科学・技術・芸術を未曾有に繁栄させる前提であると述べている。

またイギリスの唯物論者であるフランシス・ベイコン（1561～1626年）も同様の構想を『ニュー・アトランティス』で描いてみせた。

17世紀中葉のイギリスの内乱期（1642～1652年）に発生した「ディガーズ」とよばれた最左翼の運動は、ごく少数の人の短期間の運動ではあったが、しかし近代社会主義の最初の実践的運動であった。

ディガーズの代表者であるジェラード・ウインスタンリー（1609～52年）は、宗教的神秘主義から次第に農業共産主義的思想へと進んだ理論家であった。彼は貧者に対し未開の土地や共同地の耕作を直ちに開始せよと勧告した。ここからディガーズ（掘る人）という名前がつけられたのである。彼は「土地は、その人物の如何を問わず、あらゆる種類の人間全体のための生活の共同宝庫とするために、全能の神によって創造されたものである」と述べている。

彼は1649年4月、サーリー州のセント・ジョージ・ヒルに行き、共同地を掘りおこし、ソラマメなどをまきはじめ、国務院に出頭して、これは他人の財産を侵害しようとするものではなく、土地をもたない農民を共同地耕作に参加させようとするものであると言明した。彼は既存の社会秩序は富者の利益のために考案され、維持されるものであるから、教会や国家に巢喰っている彼らおよび彼らの代弁者がその廃止に同意することは期待できないとして、貧者に立ち上ることを訴えたのである。

彼は、ディガーズ運動が一度始められたなら、そこから新しい社会が平和裏に出現するだろうと期待した。そしてこれ以外に何らの社会変革の方法を設定することはなかった。ウインスタンリーについては、マルクスもエンゲルスもなんら言及してはいない。

エンゲルスは『空想から科学への社会主義の発展』（1880年）のなかで、モレリー（生年月日不明）やマブリー（1709～1785年）の共産主義思想が18世紀にあらわれたことに言及している。

モレリーも、私有財産が一切の悪の源泉であるとしてその廃止を要求した。またマブリーも社会的矛盾を除去するためには、共有制を確立しなければならないと述べている。彼はルソーに倣って人間の自然的平等を自己の理論の出発点とした。彼の思想はその後バブーフ（1760～1797年）に伝えられ、共産主義思想はフランス革命の進行過程で現われることになった。このバブーフはもっとも熱心な平等の主張者で、彼の『平等党宣言』は次のように述べている。

「われわれは真の平等か、しからずんば死を要求する。フランス革命は最後の革命である偉大かつ厳粛な革命の前触れにすぎない。われわれはさらに崇高かつ公平なものを要求する。それは公共の利益あるいは財産の共有である。土地の私有財産を廃止せよ。土地は誰のものでもない。その果実は万人のものである。」

彼は、平等と共有のためには政治権力の獲得が必要であることを主張し、民衆と軍隊による蜂起を計画したが、この陰謀に失敗し、処刑された。

フランス革命（1789年）は社会主義革命ではなく、封建制度に対するブルジョア革命であったが、社会主義思想に大きな影響を及ぼした。

マルクスとエンゲルスは、フランス革命やパリ・コンミュン（1871年）から多くのものを学んだ。

フランス革命は、18世紀の啓蒙思想家たち（ヴォルテールを代表とする18世紀の絶対王政に反対した社会思想家たち）や革命の先駆者たちがとなえた「理性的国家」、「理性的社会」というスローガンを現実のものとしようとした。しかし、フランス革命のもたらしたものは、アンシャン・レディウム（旧制度）にくらべると合理的ではあったが、決して理性的な社会ではなかった。そしてこの幻滅を訴える人びとが19世紀の初頭から現われた。すなわち空想的社会主義者の出現である。その代表者として有名なのが、サン・シモン（1760～1825年）、フーリエ（1772～1837年）、オーエン（1771～1858年）である。

彼らはすべて良心的な人道主義者であり、啓蒙思想の子であった。彼らは現実の社会を鋭く観察しながら、現実のなかに存在する変革の主体を見つけることができず、理想の社会を非科学的に夢想した。しかし、三人の考えはそれぞれ異なっている。

フランス貴族の家に生まれたサン・シモンは、奴隷制、封建制、資本制が人類発展の歴史的段階であり、社会の発展につれて、人間による人間の搾取と敵対的關係はしだいに激しさを失ない、人間のすべての能力は次第に平和の方向にむけられるとみた。彼は、社会の発展は科学的知識、道徳、宗教の進歩によろし、知識の発展段階を、①神学的段階、②形而上学的段階、

③実証主義的段階に分け、実証主義的段階を科学に基礎づけられ、計画的に組織された産業体制であり、「普遍的共同」化の達成された理想の社会であるとみた。この産業体制は、資本家、科学者、労働者によって構成されているが、彼はこの産業体制をフランス革命のあとになお残存する半封建勢力に対抗する社会として構想したのである。

サン・シモンと同じ国、同じ時代、同じ政治的経済的諸条件のもとで生まれたフーリエも、ブルジョア社会の物質的および精神的非惨さを仮借なく摘発した。

彼はフランス革命が、「自由、平等、友愛にもとづく理性と正義の社会」を実現できなかったことを痛感し、また貿易商人であった彼は、1826年の大恐慌に直面して、資本主義の不合理性を痛感し、未来社会を構想したのである。

彼の未来社会の経済単位は「アッソシエーション」であり、「ファランジェ」と呼ばれる共有制の小規模の自給自足的農業単位から構成されており、工業は農業の補助的産業とされている。この点では、工業を重視したサン・シモンより遅れている。しかし、フーリエは経営の利潤は、資本、労働、技能に応じて三等分されるものとしていることや、婦人の解放、苦しい労働からの解放など、いくつかの貴重な見解を述べている。

オーエンは、小学校を出ただけで徒弟となり、18歳で早くも資本家の経営者となり、やがて40歳すぎてその経験をまとめて『社会に関する新見解』（1813～4年）を公刊した。彼は労働者の性格や環境の改善による生産力の向上をめざした。彼は『ラナーク州の報告』（1821年）で、巨大な生産力をもつ機械の使用が人類をきずつけない体制を夢み、「ホーム・コロニー」という共産主義的模範社会を構想した。

オーエンは社会の不正や罪悪は、人間の性格を変えることによって無くすことができると信じ、貧困な働く人びとのために調和的な協同社会を実現しようとした。彼は階級闘争、政治闘争、ストライキに反対した。

オーエンの思想は、世界における最初の広範なプロレタリア的革命運動であり、イギリス労働者階級の政治運動であったチャーティズム運動（1837年から10数年にわたる）のなかでも無視できない影響を及ぼした。

空想的社会主義者たちは、初期資本主義下の労働者の非惨な状態をみて、新しい社会制度を考案し、教育活動や模範的な実験によって「理性と永遠の正義の国」を実現しようとした。彼らは資本主義の未成熟な時代に生きていたので、労働者階級が歴史の舞台に独自の階級、自己自身を解放することによって全人類を解放するという歴史的使命を担って登場したことを理解することができず、自分の頭で考えだした新しい制度を実現しようとして、空想的社会主義者となったのである。

マルクスとエンゲルスは、空想的社会主義者の見解は、資本主義生産の未熟な状態、未熟な階級状態に照応した未熟な理論であり、社会主義建設の主体であるプロレタリアートの政治的活動の意義を知ることなく、あらゆる革命的行動を非難したと厳しい批判を加えている。

空想的社会主義者たちにとっては、労働者階級は「もっとも苦しんでいる階級として存在するだけ」(『共産党宣言』)なのであり、「彼らは、プロレタリアートのがわに、なんらの歴史的な自主的活動性も、プロレタリアート独自の政治運動も、見いださない」(同上)のである。そして「階級闘争の形態の未発達と、彼ら自身の生活状態との結果として、彼らは、自分はこの階級対立をはるかに超越している」(同上)と信じていたのであり、社会活動のかわりに彼らの個人的な考察、計画を宣伝し、実行しようとしたのである。

しかし、マルクスとエンゲルスは、空想的社会主義者に厳しい批判をすると同時に、彼らを「偉大な空想家」とよび、彼らの見解を「現存社会の一切の基礎を攻撃するもの」であり、「労働者の啓蒙のためにきわめて貴重な材料を提供した」(同上)ものであり、「空想的な外被のかげからいたるところで鋭峰を表わしている天才的な思考」(『反デューリング論』1878年)であると高い評価を与えたのである。

(2) マルクス主義の創始

社会主義・共産主義を「空想から科学へ」と発展させたのは、周知のようにマルクスとエンゲルスである。

彼らは、観念論と形而上学を否定して、唯物論と弁証法を勝利させ、社会発展の法則を唯物史観「史的唯物論」として定式化し、労働者の生産する剰余価値が、利潤、利子、地代として搾取されるメカニズムを『資本論』で解明した。

マルクスとエンゲルスは、プロレタリアートこそが人間解放の歴史的使命をもつ階級であることを歴史上はじめて解明した。

マルクスが初めてプロレタリアートの歴史的な人間解放の役割を明らかにしたのは『ヘーゲル法哲学批判序説』(1843~4年)においてであった。そこでマルクスは、「社会のあらゆる領域から自分を解放し、それを通じて社会の他のあらゆる領域を解放する特殊な身分」、それがプロレタリアートであると述べている。

次でマルクスは『聖家族』(1844年9月)で、階級としてのプロレタリアートがもつ人類解放の歴史的使命についての見解を大体において仕上げている。この著書でマルクスは、プロレタリアートは、資本主義のもとで、彼らが占めている地位のおかげで「自分自身を解放することができるし、また解放せざるを得ない」が、それと同時にブルジョア社会のいっさいの非人間的な生活条件を廃止することができ、また廃止せざるを得ないことを明らかにしたのである。

マルクスは『哲学の貧困』(1847年)では次のように述べている。

「労働者階級の解放の条件、それはあらゆる階級の廃止である。……労働者階級は、その発展の過程において、諸階級とその敵対関係を排除する一つの共同社会をもって、ふるい市民社会におきかえるであろう。」

では、プロレタリアートは、どのようにしてみずからを解放するのか。この解答は『共産党

宣言』によって与えられている。

マルクスとエンゲルスは1848年に『共産党宣言』を発表し、ほぼまとまった形で科学的社会主義・共産主義理論を明らかにした。

『共産党宣言』は、第一章「ブルジョアとプロレタリア」、第二章「プロレタリアと共産主義者」、第三章「社会主義的および共産主義的文献」、第四章「種々の分野に対する共産主義者の立場」、の4章（但し原文では「章」とはしていない）からなっている。

『共産党宣言』は第一章の冒頭で「今日までのあらゆる社会（但し当時はまだ原始の無階級社会については知られていなかった）の歴史は階級闘争の歴史である」と述べ、ブルジョア階級は、大工業の発展とともに「かれら自身の墓掘人を生産する。かれらの没落とプロレタリア階級の勝利はともに不可避である」と述べている。

第二章では、プロレタリア階級の利益を代表する共産主義者の任務を、共産主義への種々なる反論や疑問にかかわらせて解明している。この章でマルクスとエンゲルスは「労働者革命の第一歩は、プロレタリア階級を支配階級にまで高めること、民主主義を闘いとることである。……プロレタリア階級は、その政治的支配を利用して、ブルジョア階級からしだいにすべての資本を奪い、すべての生産手段を国家の手に、すなわち支配階級として組織されたプロレタリア階級の手に集中し、生産諸力をできるだけ急速に増大させるであろう」と述べている。

ところで『共産党宣言』は、文字通り共産主義社会を志向する宣言であって、『社会党宣言』とはなっていない。これまで本稿でも社会主義と共産主義という二つのことばを使用しているが、ではこの二つのことばは、どのような関係にあることばであろうか。以下、項を改めて考察しよう。

2 社会主義と共産主義について

現在、一般的に低い発展段階の共産主義を社会主義とよび、高い発展段階の共産主義と区別して使用されている。

しかし社会主義、共産主義ということばは、それが使用されはじめた当初は、さまざまな内容をもつものであった。

社会主義 Socialism という用語は、東大教授の伊藤誠氏によれば、1827年11月に、ロンドン協同組合協会の機関誌 Co-operative Magazine で初めて用いられ、1830年代に普及し、定着した（『現代の社会主義』講談社学術文庫参照）といわれており、さほど古いことばではない。

当初それはオウエンの影響のもとに成長しつつあった協同組合運動のなかで、個人主義に対立する協同組合主義的改良主義をおもに意味していた。

しかし、やがて資本主義社会の実状に不満をもつ種々の急進的グループの運動および彼らが目指した理想社会をあらわす用語として、1840年代に広く用いられるようになった。

これに対して共産主義 Communism ということばは、フランスにおける1830年の7月革命から1848年の2月革命にかけてのヨーロッパ諸国の社会的動乱の時代に、フランスなどで社会主義ということばとならんで用いられるようになった。

共産主義は、階級と私有財産を廃止し、共有 Communaute にもとづく協同社会 Commune をめざそうとする理想をさしていた。コンミュン（共同体ないし協同生活）主義を共産主義と邦訳したのには問題もあろうが、この共産主義の目標は、社会主義のそれよりも、より徹底した共有性をめざしており、その実現の方途もより戦闘的であった。

『共産党宣言』では、奴隷制、封建制、資本制社会につづく社会は共産主義社会と名づけられている。

『共産党宣言』は、当時存在していたさまざまな社会主義と自己の見解を区別するために、それを共産主義ということばで表現したものであろう。

『共産党宣言』は、さまざまな社会主義として次の五つの社会主義をあげている。

①フランスやイギリスの貴族が、民衆の同情をうるために、民衆の利益を守ってブルジョア社会に反対しているかのようにみせかけて唱えた「封建的社会主義」。

②小ブルジョアジーの立場から労働者のがわについてブルジョアジーに反対する「小ブルジョア社会主義」。

③フランスの社会主義をフランスからドイツへ輸入して唱えた「ドイツ社会主義（「真正社会主義」）」。

④ブルジョア社会の存続をはかるための「保守的あるいはブルジョア的社會主義」。

⑤「批判的＝ユートピア的社會主義」（前述した「空想的社會主義」を指す）。

このように、マルクスとエンゲルスは、『共産党宣言』では、社会主義者と自称しているさまざまな人びとの見解と自己の見解を区別して、『共産党宣言』としている。

しかし、マルクスとエンゲルスが「科学的社会主義」と自己の見解を述べていることでもわかるように、社会主義という用語を彼らは否定するものではなく、その後、マルクス主義の運動は社会主義の運動とみられ、また社会主義思想は、第1インターナショナルの指導思想となったのである。すなわち、社会主義運動の分野で、小ブルジョアジーの理論家であり、無政府主義の理論的創始者の一人であるブルードン（1809～65年）や、プロイセンのヘゲモニーのもとで「上から」のドイツ統一を支援し、ドイツの労働運動の日和見主義の始祖となったラサール（1825～64年）や、ロシア無政府主義の理論家で、国際労働者協会内でマルクスの宿敵として行動したバクーニン（1814～76年）などの諸潮流をしのいで、ヨーロッパにおける社会主義運動の主流となったのであり、こうして社会主義と共産主義という二つの用語が、ほぼ同じ意味で使用されるようになったのである。

マルクスは現実には社会主義・共産主義が実現するのを見ることなく——彼は自動車すらみることもなかった——世を去ったが、社会主義・共産主義社会がどのような社会であるかについて

ての原理的な説明を，有名な『ゴータ綱領批判』で述べている。

1875年，ドイツでは社会主義運動が分裂していたが，運動の統一をめざして，社会民主労働党と全ドイツ労働者協会の活動家たちは，ゴータで開かれた大会で一つの統一綱領を採択した。これが《ゴータ綱領》である。マルクスは，この《ゴータ綱領》を執筆したラサールの見解を各項目ごとに徹底的に検討し，詳細は『ドイツ労働者党綱領評注』をロンドンの自宅からドイツの弟子たちに書き送った。これが『ゴータ綱領批判』である。

この著作は豊富な新しい理論をふくんでおり，マルクス主義の重要な必読文献であるが，この文献でマルクスは二つの問題，第一は，共産主義の二つの段階，すなわち共産主義の低い段階と高い段階の問題，第二は，資本主義から共産主義の過渡期とプロレタリアートの独裁の問題をとりあげている。この二つの問題は，いずれも極めて重要である。

マルクスは『ゴータ綱領批判』で，共産主義を低い段階の共産主義と高い段階の共産主義とに分け，低い段階の共産主義について，「それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではなく，反対にいまようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。したがって，この共産主義社会は，あらゆる点で，経済的にも道徳的にも精神的にも，その共産主義社会が生まれでてきた母胎たる旧社会の母斑をおびている」と述べ，低い段階の共産主義社会と高い段階の共産主義社会との相違について，前者はまだ生産力が低く，したがって，「能力に応じて働き，働きに応じて受けとる」社会であるのに対し，後者は生産力の向上によって「能力に応じて働き，必要に応じて受けとる」ことのできる社会である，と規定した。

マルクスは，低い段階の共産主義社会では，労働者は「削減されない全労働収益」を受け取るというラサールの見解を批判し，労働者は彼の個人的労働の生産物のすべてではなく，社会が存続するために必要なものを控除した残りのものを受け取るのであるとして，共産主義の低い段階では「個々の生産者は，彼が社会ににあたえたのと正確に同じものだけを——控除したうえで——返してもらう。個々の生産者が社会にあたえたものは，彼の個人的労働量である」と述べている。そして，上記の「控除したうえで」と述べている「控除」の内容を以下のように列挙している。

- ①消費された生産手段の補填分。
- ②生産を拡張するための追加分。
- ③事故や天災などの障害にそなえる積立分。

さらに，各個人に分配されるまえにつきのものが控除される。

第1に，直接に生産に属さない一般管理費。

第2に，学校や衛生設備などのような各種の欲求を共同でみたすためにあてる部分。

第3に，労働不能者などのための元本。

このほか，必要やむをえない自衛上の軍事費など。

さて，このような共産主義社会の第一段階では，各人は能力に応じて働き，働きに応じて受

けとるという権利が認められている。しかしこの権利は、まだ過渡的段階での平等の権利である。

マルクスはいう。

「ここでは平等な権利は、まだやはり——ブルジョア的権利である。もっとも、もう原則と実際とが衝突することはない。ところが商品交換のもとでの等価物の交換は、たんに平均として存在するだけで、個々の場合には存在しないのである。」(同上)

商品生産社会の等価交換の法則は、マルクスが『資本論』で解明しているように、絶えざる不等価交換のなかで、事後的、傾向的に貫徹されるのであって、ある与えられた時点での等価交換は、偶然以外にはあり得ないのである。

しかし、共産主義の低い段階での等価交換は、原則と実際が衝突することなく実現されるのである。それゆえ「能力に応じて働き、働きに応じて受取る」という原則は、ブルジョア社会における等価交換の法則よりは進歩的であるが、しかし、それはまだ「つねにブルジョア的制限につきまといわれている」のである。

これに対して、共産主義の第二の段階は、「共産主義の固有の土台」に立つ「より高い」段階であり、ここでは能力に応じて働き必要に応じて受けとるという、より高い原則が支配する。

マルクスは述べている。

「共産主義社会のより高度の段階で、すなわち個人が分業に奴隷的に従属することがなくなり、それとともに精神労働と肉体労働との対立がなくなったのち、労働がたんに生活の手段であるだけでなく、労働そのものが第一の生命欲求となったのち、個人の全面的な発展にともなって、またその生産力も増大し、協同的富のあらゆる泉がいっそう豊かに湧きでるようになったのち——そのときはじめてブルジョア的権利の狭い限界を完全に踏みこえることができ、社会はその旗の上にかこう書くことができる——各人はその能力におうじて、各人はその必要におうじて！」

マルクスは、「社会主義は共産主義の低い段階である」と『ゴータ綱領批判』で述べている、と書いている著書を見ることがある。しかし、これは不正確である。『ゴータ綱領批判』には、社会主義という用語は全く使用されていないのである。

低い段階の共産主義社会が、社会主義社会であるという理解が一般的になったのは、レーニンの『国家と革命』発表以降である。

レーニンは、1917年10月革命の前夜に書いた小冊子『国家と革命』のなかで、マルクスが『ゴータ綱領批判』で述べた共産主義の第一段階について「これが普通には社会主義と呼ばれる」と述べており、また「社会主義と共産主義との科学的相違は明白である。ふつう社会主義と呼ばれているものを、マルクスは共産主義社会の『第一』段階、もしくは低度の段階と名づけた。生産手段が共有財産になっている限りでは、もしこれが完全な共産主義でないことをわすれさえしなければ『共産主義』ということばは、このばあいにももちろん用いることができ

る。マルクスの解明の偉大な意義は、彼が、ここでも唯物弁証法、発展の学説を一貫して適用し、共産主義を資本主義から発展しつつあるものとして観察している点である」と述べている。

このようなレーニンの指摘もあって、それ以降、社会主義が共産主義の低い段階（第一段階）を意味するという理解、ならびに共産主義は高い段階において、初めて完成するという理解が一般的となったのである。

金日成主席は、共産主義の高い段階について次のように述べている。

「共産主義のたかい段階というのは、労働者と農民との差異のない無階級社会であるばかりでなく、精神労働と肉体労働との差異もなく、社会のすべての構成員が能力に応じて働き、必要に応じて分配をうける、高度に発展した社会です。」（『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』1967年5月25日）

以上でみたように社会主義社会と共産主義社会は区別されるが、しかしそれは、共産主義社会の低い段階と高い段階の区別なのであるから、社会主義社会も共産主義社会であるという前提のもとでの区別である。

こうして、今日では共産主義ということばは、広・狭二つの意味で使用されており、広い意味での共産主義とは、社会主義と狭い意味の共産主義を包括しており、狭い意味の共産主義は、高い段階の共産主義だけを意味するのである。

ところで、以上のマルクスの見解を継承したうえで、さらに、人間中心の観点から、社会主義と共産主義の差異を規定した見解がある。すなわちチュチェ思想にもとづく社会主義・共産主義観である。

金正日書記は、人間中心の見地から見ると、「共産主義というのはすべての人間があらゆる拘束から終局的に解放され、自然と社会と自分自身の完全な主人となる社会だと言えるでしょう。共産主義社会では社会のすべての成員が、人間の社会的本性に即した自主的な思想意識と創造的能力を全面的にそなえた完成した社会的人間となるでしょうし、生産力は社会生活のすべての分野で人間の自主的で創造的な活動を物質的に完全に保障しうる高い水準に達することでしょう。これにともなって、社会関係は全社会が一つの社会政治的生命体をなし、個人と集団の自主性がともに実現される完全な集団主義的社会関係になるでしょう。一言で言って、共産主義社会は人民大衆の自主性が完全に実現される社会であります。社会主義社会は共産主義社会の低い段階であります。」（『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』1992年1月3日）と述べている。

金日成主席も次のように述べている。

「社会主義・共産主義建設の偉業は、人民大衆の自主性を完全に実現するための聖なる偉業です。自主性を完全に実現するのは、人民大衆の世紀の願望であり、最高の理想であります。」（『社会主義の完全な勝利のために』1986年12月30日）

人間の自主性とは、この世界で、唯一人間だけが所有している社会的人間の特性であり、自

自主性がなければ、最早人間ではない。人間は、当初、極めて低い自主性をもっていたが、どんなに低い自主性でも、自主性をもつことにより、他の一切の動物と区別される人間となったのである。そしてこれまでの人類の歴史は自主性の発展の歴史にほかならないのである。

人間の自主性を完全に実現する共産主義への道は、人類の理想を実現するための道である。

金日成主席は、「資本主義から社会主義への過渡期をへて社会主義の完全な勝利を達成し、完全な社会主義をへて共産主義の高い段階へ移行するのは、社会主義・共産主義建設の合法的道程です」(同上)と述べているが、この道程が、つまり自主性を完全に実現する道程にほかならない。

主席は、人間中心の見地から、共産主義の高い段階を自主性の完全に実現された社会である、との規定を歴史上はじめて与えたのである。

3 資本主義から共産主義へ過渡期としての社会主義

ソ連、東欧の社会主義は崩壊したが、北朝鮮、キューバをはじめとする若干の社会主義が現存——ただし中国は市場経済を導入しつつも中国共産党が権力を掌握しているという特長をもっている——しているが、それらはすべて資本主義から共産主義への過渡期の社会主義国である。

そこで過渡期の社会主義についての正しい理解がなければならない。とくに過渡期とプロレタリアートの独裁については論議のあるところであり、金日成主席は、この問題についてのマルクス・レーニン主義の見解をどのように理解しなければならないか、また朝鮮革命にマルクス・レーニン主義のこの問題についての教条をどのように適用すべきかについて、古典的労作『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』(1967年5月25日)で解明している。

ある国が社会主義制度を樹立したということは、その国の人民大衆の自主偉業にとって大きな成果であるのは勿論であるが、しかし人間の自主性が完全に実現される共産主義社会の実現にいたるまでの路程からみるときは、まだ出発点を意味するだけである。

金正日書記は述べている。

「社会主義・共産主義建設において、共産主義社会を実現することが最終目標であるとすれば、社会主義制度の樹立はその出発点となります。社会主義革命が勝利し社会主義制度が樹立されたと言う時、それは社会主義政権が樹立され、社会主義的生産関係が確立されて人民大衆が主人となる新しい社会の骨格が形成されたことを意味しています。社会主義制度の樹立は人類社会発展の見地から見ると巨大な歴史の変革とはなりますが、社会主義・共産主義建設の路程から見ると最初のスタートにすぎません。」(『社会主義建設の歴史的教訓とわが党の総路線』)

スタート線上に立った社会主義政権は、共産主義を目指して進まなければならない。ここに過渡期が存在する。

過渡期の社会主義の目標は何であり，その目標実現の方途はどのようなものであろうか。

この問題に対しては，社会主義諸国のあいだでも，またその内部でも，見解の対立がみられてきた。

フルシチョフは1961年10月の第22回党大会で，1980年までに，必要に応じた分配をする共産主義の高い段階を実現するという「綱領」を採択させたが，いわゆる中ソ論争も過渡期の問題にかかわるものであった。

金正日書記は，朝鮮民主主義人民共和国の内部でもこの問題についての修正主義理論があったことを次のように述べている。

「反党反革命分子は，思想理論分野でもブルジョア思想，修正主義思想を多くまき散らしました。修正主義に毒された一部の学者は，社会主義制度が樹立されれば資本主義から社会主義への過渡期が終わり，プロレタリアート独裁と階級闘争は必要でなくなるといいましたが，それはわが党の継続革命の思想を否定するものであり，人民政権の独裁機能を弱め，人民の階級意識を麻痺させる修正主義理論です。」（『反党反革命分子の思想的毒素を一掃し，党の唯一思想体系を確立するために』1967年6月15日）

それぞれの社会主義諸国は，マルクス・レーニン主義の原理・原則を自国の実情にあわせて創造的に実現すべきである。資本主義から社会主義もしくは共産主義への過渡期とプロレタリアートの独裁についてのマルクス・レーニン主義の教訓についても，当然，教条主義的理解におちいつてはならないのである。

（1） 過渡期と過渡期における階級闘争とプロレタリアートの独裁

マルクスは『ゴータ綱領批判』（前出）で「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには，前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は，プロレタリアートの革命的独裁以外のなものでもありえない」と述べている。

またレーニンも『国家と革命』（1917年8～9月）で，「空想主義者や社会主義革命をおそれる今日の日和見主義者が忘れている「第一のことは，資本主義から共産主義への過渡の特別の段階，もしくは特別の時期が，歴史上うたがいがなく存在するという事実である」と述べ，「資本主義社会から共産主義社会への移行は，『政治上の過渡期』なしには不可能である。そして，この時期の国家でありうるものは，ただプロレタリアートの革命的独裁だけである」と述べ，さらに「資本主義から社会主義への移行は，もちろん，おどろくべき豊富で多様な政治形態をもたらさざるをえないが，しかしそのばあいにも，本質は不可避免的にただ一つ——プロレタリアート独裁であるだろう」と述べている。

レーニンはこの著作で，プロレタリアート独裁によってのみ資本家的搾取者の反抗を破綻させることができるのであって，その他のだれにも，また他のいかなる方法でも不可能であるこ

とを指摘し、「マルクスの学説における主要なものは階級闘争である。とたたかれ、また書かれることが非常に多い。しかしこれはまちがいである。

……ただ階級闘争の認識をプロレタリアートの独裁の認識にまでおしひろめる人だけがマルクス主義者である」と述べている。

レーニンが1919年11月のプラウダ論文『プロレタリア独裁の時期における経済と政治』で、改めて過渡期について次のように述べている。

「資本主義と共産主義のあいだに一定の過渡期があることは、理論上疑いをいれない。この過渡期は、二つの社会経済制度の特徴または特性を一つに結合したものとならざるを得ない。この過渡期は死滅しつつある資本主義と生まれようとする共産主義との闘争、いいかえれば、打ち破られたが絶滅されていない資本主義と生まれはしたがまだまったく弱い共産主義との闘争とならざるを得ない。」

金正日書記は、階級闘争とプロレタリアート独裁についてのマルクスの見解について次のように述べている。

「マルクスは資本主義社会の階級関係の分析にもとづき、資本家の支配を一掃し、人間による人間の搾取を最終的に廃絶し、新しい共産主義社会を創造する使命を担ったもっとも先進的かつ革命的階級はほかならぬ労働者階級であることを明らかにし、ブルジョアジーにたいする労働者階級の階級闘争は必然的にプロレタリアートの独裁をもたらすことをせん明した。階級闘争とプロレタリアート独裁にかんするマルクス主義思想は、階級的解放と共産主義の実現をめざす労働者階級の闘争の強力な武器となった。」(『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう』1983年5月3日)

金日成主席は、過渡期の全期間にわたって階級闘争と階級の敵にたいする独裁の不可欠なことを次のように述べている。

「搾取階級が一掃され、生産関係の社会主義的改造がおわったのちにも、資本主義から社会主義への過渡期の全期間にわたって階級闘争は続けられます。もちろん都市と農村で社会主義的改造が完成すれば、搾取階級は階級として完全に一掃され、その社会的・経済的地盤もはや存在しなくなります。しかし、その残存分子は依然として残っており、かれらは自己のかつての地位をとりもどそうとする妄想をすてずにたえず破壊活動を強行します。それゆえ、社会主義制度が勝利したのちにも、社会主義社会には敵対的諸要素が長いあいだ残るようになります。この敵対的諸要素は、それ自体としてはたいして大きなものではないが、それが外国帝国主義者の利用物に、その手先になっているために、これを決してゆるがせにするわけにはいかないのであります。帝国主義者は、社会主義国家に反対し侵略するうえで直接的な武力干渉をおこなう一方、社会主義国の内部に残っている転覆された搾取階級の残存分子と反動どもを糾合し、かれらをそそのかして、社会主義国家を内部から破壊しようと策しています。……

われわれはなによりもまず、階級敵にたいする独裁を強化し、思想革命を徹底的に遂行し、

全社会を革命化、労働者階級化しなければなりません。」(『朝鮮民主主義人民共和国は、わが人民の自由と独立の旗じるしであり、社会主義共産主義建設の強力な武器である』1968年9月7日)

ここで注意すべきことは、金日成主席が、階級闘争とプロレタリアート独裁の理論を継承しているだけでなく、人民大衆中心の社会主義・共産主義建設の見地から、思想革命を強調し、全社会の革命化、労働者階級化を明確にしていることである。

なお、同じく階級闘争といっても、資本主義を打倒するための階級闘争と、社会主義制度樹立後の階級闘争とはその形態が異なる。資本主義社会での階級闘争は、プロレタリアートの独裁を実現するための、社会主義制度を樹立する敵対階級に対する階級闘争であるが、過渡期社会主義社会の階級闘争は、プロレタリアート独裁のもとでの友好的な社会の成員間の、統一と団結をめざす階級闘争である。

主席はこのことを次のように述べている。

「階級闘争がおこなわれる以上、プロレタリアートの独裁は存在するものであり、プロレタリアート独裁は、階級闘争をおこなうために必要なのです。しかし、階級闘争の形態はいろいろあります。資本主義をうち倒すときの階級闘争と、資本主義をくつがえしたあとの階級闘争とはその形態がちがいます。

……社会主義革命をおこなうときの階級闘争は、階級としての資本家を一掃するための闘争であり、社会主義社会における階級闘争は、統一と団結を目的とする闘争であって、これはけっして社会の成員が反目し、嫉視しあうための階級闘争ではありません。社会主義社会では階級闘争をおこなうが、それは統一と団結を目的にして、協力しあう方法でおこなう階級闘争です。こんにち、われわれのおこなっている思想革命が階級闘争であるのはいうまでもないことであるが、農民を労働者階級化するため、農村に援助をあたえるのも階級闘争の一形態です。なぜなら、労働者階級の国家が農民に機械をつくってやり、化学肥料を供給し、水利化をやってやる目的は、けっきょく、階級としての農民をなくし、かれらを完全に労働者階級化しようとするところにあるからです。われわれが階級闘争をおこなう目的は、農民を労働者階級化して階級としての農民をなくすだけでなく、かつての知識人や都市の小ブルジョアジーをはじめとする中産階級を革命化して、労働者階級の姿に改造しようということです。これが、われわれのおこなっている階級闘争のおもな形態です。」(同上)。

このように社会主義社会での階級闘争は統一と団結のためのものである。しかし、社会主義社会には、まだ搾取階級の残存分子が存在しているので、敵対的な階級闘争も、なお残らざるを得ない。

主席はこのことを次のように述べている。

「また、われわれの制度のもとでは、外部からは反革命勢力の破壊的影響がおよび、内部ではくつがえされた搾取階級の残存分子が蠢動するため、かれらの反革命的策動を鎮圧するための階級闘争がおこなわれるようになります。」(同上)

なお、レーニンもプロレタリアート独裁は暴力なくしては不可能であるが、しかし「直接に暴力に立脚」するだけでなく、種々の形態があることを次のように述べている。

「プロレタリアートの独裁は、旧社会の諸勢力と伝統に対する頑強な闘争であり、流血のものもそうでないものも、暴力的なものも、平和的なものも、軍事的なものも、経済的なものも、教育的なものも、行政的なものもある。」（『共産主義における「左翼」小児病』1920年4～5月）

以上でみたように、過渡期の社会主義社会では、プロレタリアートの独裁が不可欠であり、これによってのみ、労働者階級の敵を鎮圧し、人民大衆には真の民主主義を保障することができるのである。

（2）プロレタリアートの独裁と民主主義

ブルジョア民主主義は、その本質においてブルジョアジーの独裁であるが、プロレタリアートの独裁は、その本質において人民大衆の真の民主主義である。プロレタリアートの独裁を、非民主主義とみる見解は、まったく不正確である。

金正日書記は次のように述べている。

「ブルジョア民主主義は、少数の搾取階級には民主主義を実施するが、勤労人民大衆には独裁を実施する反人民的な『民主主義』です。民主的自由と生存の権利をめざす広範な勤労人民大衆のたたかいを過酷に弾圧するブルジョア民主主義は、決して真の民主主義とはなりえません。帝国主義者と反動派はブルジョア議会制とブルジョア多党制を『民主主義』と標ぼうしていますが、ブルジョア議会制とブルジョア多党制の背後で政治を操る実際の影武者は大独占資本です。」（『人民大衆中心の朝鮮式社会主義は必勝不敗である』1992年5月5日）

これにたいして、プロレタリアートの独裁こそは真の民主主義である。

書記は次のように述べている。

「社会主義的民主主義は、人民大衆には民主主義を実施しますが、それを侵害する階級の敵にたいしては独裁を実施します。帝国主義者と反動派が、社会主義社会で階級の敵に独裁を実施するからといって、社会主義的民主主義を中傷しているのは、つまるところ、社会主義に反対するかれらの犯罪的策動に道を開けということです。帝国主義者とその手先が社会主義的民主主義に反対して破壊・謀略策動をおこなっている状況のもとで、人民大衆の自主性を侵害する階級の敵に制裁を加えるのは当然のことです。」（同上）

これまで歴史上、いろいろな形の民主主義がみられた。

古代奴隷制国家における民主主義は、奴隷所有者と自由民のための民主主義であり、奴隷にはなんらの権利も自由もなく、奴隷は「言葉をしゃべる動物」にしかすぎなかった。

自由と平等をめざす民主化闘争で重要な位置を占めたのは、封建的身分制度の従属から自由になるための反封建闘争であった。

反封建闘争は、資本主義をめざすヨーロッパでさきに発展したが、特にフランス革命で掲げ

られた自由、平等、友愛のスローガンは、国際的に大きな影響を及ぼした。こうして自由と平等を基本内容とする民主主義は、ヨーロッパにおける近代政治の基本的原理として認められるようになったのである。

当時の自由、平等、友愛のスローガンには、資本家階級の要求だけでなく、広範な勤労人民大衆の要求も含まれていた。

反封建民主主義革命の時期に提起された自由と平等の思想が、しだいに資本主義の政治理念となったのは、資本家階級が反封建民主主義革命の先頭にたって闘ったからである。

反封建闘争の過程では、資本家階級と勤労人民の利益は一致していた。

反封建闘争で資本家階級とその代弁者たちは、民主主義の理念を重要な思想的理論的武器とした。

初期のブルジョア思想家たちは、民主主義の諸原則をかかげて、「理性の王国」を描き出した。ブルジョア民主主義は、それが単なる政治理念にすぎなかったあいだは、不正義と特権、身分的従属と抑圧がない、正義と平等、人権と自由が尊重され、実現される理想の社会をもっともらしく説教することができた。しかし、資本主義制度の樹立後、初期のブルジョア思想家があればほど熱狂的に唱えた民主主義の理念は実現されず、現実と理想は深刻な矛盾におちいった。すなわち封建貴族にかわり、搾取階級である資本家階級と被搾取階級である賃金労働者階級との財産上の不平等が生まれたのである。そしてブルジョア思想家たちの説いたあの希望にみちた自由は、資本家階級が労働者を無制限に搾取できる自由、弱肉強食のもとでの企業の競争の自由、職を失なった勤労者の餓死と貧困の自由となり、平等の原則は富者と貧者、搾取者と被搾取者の存在する現実のなかで空虚なスローガンとなったのである。

こうして初期ブルジョア思想家の「理性の王国」は「資本の王国」となり、ブルジョア社会における人民主権、平等、自由、人権の尊重などの民主主義の理念は、搾取階級の独裁と搾取制度の反人民的性格をおおいかくす隠れみのとなったのである。

労働者階級はこうして現実と直面し、プロレタリア革命に勝利して社会主義制度を樹立し、ブルジョア民主主義とブルジョア独裁を否定して、社会主義的民主主義を確立しなければならないことを自覚するにいたったのである。

過去の階級社会における一切の民主主義は真の民主主義ではない。社会主義的民主主義のみが真の民主主義である。

プロレタリアートの独裁は、搾取階級を鎮圧し、人民大衆にたいして真の民主主義を実施するという二重の役割を果たすものであり、プロレタリアート独裁の意義はまさにここにある。

金日成主席は述べている。

「プロレタリアート独裁の歴史的使命は、搾取階級を一掃し、その反抗を鎮圧する一方、すべての勤労者を教育し改造して革命化、労働者階級化し、あらゆる階級の差異をしだいになくし、共産主義を建設することにあります。われわれは、党の階級路線と大衆路線を正しくむす

びつけて、ひとにぎりの敵対分子を孤立させ、鎮圧するとともに、広範な大衆を教育し改造して党のまわりにいっそうかたく結集しなければなりません。】（『朝鮮民主主義人民共和国は、わが人民の自由と独立の旗じるしであり、社会主義共産主義建設の強力な武器である』）

ここにプロレタリアート独裁の二つの役割、プロレタリアート独裁こそが真の民主主義であることが明確に述べられている。

（3）朝鮮革命における過渡期とプロレタリアートの独裁

では、過渡期はどのくらいの期間つづくのか、また過渡期とプロレタリアートの独裁はどのような関係にあるのか。

金日成主席は、朝鮮革命における過渡の開始について次のように述べている。

「われわれは祖国を解放したのち、遅滞なく日本帝国主義の植民地支配機構を一掃して人民政権を樹立し、それに依拠して反帝反封建民主主義革命を徹底的に遂行し、北半部に人民民主主義制度を樹立しました。わが党は、反帝反封建民主主義革命を通じてかちとった社会変革にもとづき、人民政権を革命発展の要求に即してプロレタリアート独裁の機能を果たす社会主義政権に強化発展させました。これは、わが国で社会主義への進軍の歴史的な一転機となり、このときから朝鮮人民は資本主義から社会主義への過渡期の任務を遂行する道にふみいりました。」（『社会主義の完全な勝利のために』）

では朝鮮革命における過渡期とプロレタリアート独裁はいつまで続き、いつ終るのであろうか。この問題について、かつて共和国でも朝鮮革命の具体的現実にもとづかない、マルクス・レーニン主義の教条主義的解釈がみられたのであるが、主席は、1967年5月25日、『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』を発表し、この問題を解明した。

以下、この論文を学び、過渡期とプロレタリアート独裁についての理解を深めよう。

主席はこの論文で、過渡期とプロレタリアート独裁の問題を解明するためには、マルクス・レーニン主義の見解を機械的に適用すべきではなく、朝鮮の具体的な現実を考慮しなければならないとして次のように述べている。

「われわれは、植民地農業国のきわめてたちおくれた生産力をうけついだ条件のもとで、社会主義革命をおこなったし、いまなお資本主義が相当な勢力として世界にのこっている環境のなかで、社会主義を建設しています。

過渡期とプロレタリアート独裁の問題を正しく解明するためには、かならず、われわれのこうした具体的な現実を考慮にいれなければなりません。」（同上）

主席はマルクスの見解を学ぶにあたって、かならず注意すべきことを次のように指摘している。

「過渡期の問題を正しく理解するためには、まず、マルクス・レーニン主義の創始者たち、

とくにマルクスがいかなる歴史的環境において、いかなる前提のもとに、この問題を設定したかということ考察してみる必要があります。

われわれのみるところでは、第一に、マルクスが社会主義にかんする定義をくだし、資本主義から共産主義への過渡期、または資本主義から社会主義への過渡期の問題を設定したとき、あきらかに発達した資本主義国家を念頭においていたのです。」(同上)

主席は続いてさらに以下の見解を述べている。

発達した資本主義国を念頭においたため、マルクスは過渡期を比較的短かく考えた。なぜなら、発達した資本主義国では労働者階級と農民との階級的差異がなく、農業生産力と工業生産力がほとんど同一水準にあるので、マルクスは資本家階級を打倒して資本主義的所有を全人民的所有にかえさえすれば、比較的短い期間に過渡期の任務を遂行し、共産主義の高い段階に移行することができると思ったからである。

マルクスが過渡期を比較的短かく考えたもう一つの理由は、彼がヨーロッパの主な資本主義諸国が、ほとんど同時に連続革命をおこし、世界革命がわりに早く勝利すると考えたからである。

またマルクスは、世界革命がほとんど同時に勝利すると考えただけでなく、過渡期とプロレタリアート独裁は時期的にも照応するとみ、両者を切り離せないものと規定した。

主席は以上のように述べたあと、レーニンの見解について次のように述べている。

「レーニンもまた、過渡期とプロレタリアート独裁の問題を提起したとき、基本的にマルクスの立場をうけついでとみることができます。もちろん、レーニンが生活し、活動したロシアは、マルクスが活動したイギリスやドイツとは異なり、同じ資本主義ではあっても発達した資本主義国家ではなく、たちおくれた資本主義国家であったため、マルクスのように、過渡的段階である社会主義段階をみじかい期間とはみず、比較的ながい期間とみたのでした。

しかし、レーニンもマルクスの見解にしたがって、労働者階級が資本主義制度をくつがえして政権をにぎったとしても、まだ労働者と農民との階級的差異がのこっている。そのような社会は、もちろん共産主義社会ではなく、完全な社会主義社会でもない、過渡期の社会であるとのべました。そして社会主義を完全に実現するためには、階級としての資本家を打倒するだけではたりず、労働者と農民との差異をなくさなければならない、とのべました。

このように、レーニンは、けっきょく、労働者階級が資本家階級を打倒したのち、労働者階級と農民との差異のない無階級社会を実現するときまでを、資本主義から社会主義への過渡期、または共産主義への過渡期とみたのでした。過渡期についてのこのような定義は根本的に正しいものと考えます。」(同上)

主席はこのようにマルクス・レーニン主義の創始者たちの与えた過渡期とプロレタリアート独裁についての規定は、それぞれの当時の歴史的条件とかれらが出発した前提のもとでは根本的に正しいことを指摘し、「資本家階級を打倒したのちに、労働者階級と農民との差異が消滅

された無階級社会を実現してはじめて、資本主義から社会主義、または共産主義への過渡期がおわることだけは事実」であり、また「すべての国で社会主義革命が連続的に起こって、全世界的規模で革命が勝利するばあいには、過渡期とプロレタリアート独裁は照応することになり、過渡期がおわればプロレタリアート独裁もなくなる」し、さらに「一国、または一部の地域で社会主義が建設され、無階級社会が実現されれば、全世界的規模で革命が勝利しなくとも、過渡期はおわるとみるべきなのである」と述べている。

しかし主席は、そうだとすると朝鮮では過渡期が終ってもプロレタリアート独裁は必要であり、それは「共産主義の高い段階まで、かならず存続されねばならない」し、また条件によっては「共産主義の高い段階にいたっても、プロレタリアート独裁は依然として存続しなければならない」と述べ、その理由として、一国、または一部の地域で共産主義を実現したとしても、そうした社会は帝国主義の脅威をまぬがれえないし、外部の敵と結託した内部の敵の反抗をまぬがれえないからであることを指摘し、次のように述べている。

「世界に資本主義が残っているかぎり、プロレタリアートの独裁はなくなりえないし、ましてや国家の凋落については口にすることもできないでしょう。したがって、われわれが過渡期とプロレタリアート独裁の問題を正しく解明するためには、マルクスやレーニンの命題に教条主義的にしがみつ়べきではなく、わが国における社会主義建設の実践の経験から出発してこの問題を解釈しなければなりません。」(同上)

主席が正しく指摘したように、世界に資本主義・帝国主義が残っている限り、過渡期が終ってもプロレタリアートの独裁は堅持されねばならないのである。

しかし、過渡期の境界線をどこで引くのか、またプロレタリアートの独裁をいつまで続けるべきかという問題については、これまでに左右の誤った見解がみられた。すなわち、社会主義革命の勝利(社会主義制度の樹立)までを過渡期とみる右翼の見解と、共産主義の高い段階までを過渡期とみる左翼の見解がこれである。

主席はこの二つの誤った見解について次のように述べている。

「右翼日和見主義的偏向は、過渡期を労働者階級が主権をかちとった時から社会主義制度の勝利までとみて、過渡期とプロレタリアート独裁の期間を一致させたところから、過渡期がおわればプロレタリアート独裁の歴史的使命もおわるとみる点にあります。」(同上)

右翼日和見主義的見解は、労働者階級が政権を掌握したときから社会主義制度を樹立するまでを過渡期とみているのであるが、「社会主義制度の樹立」と「社会主義の完全な勝利」とは、まったく別のことがらなのである。

主席はこのことを次のように述べている。

「資本家階級を打倒して社会主義革命をおこなったからといって、完全な社会主義社会が建設されるわけではありません。それゆえ、われわれはいまだかつて、社会主義制度の樹立をもって社会主義の完全な勝利だといったことはありません。」(同上)

主席は、右翼の偏向が生まれた理由を次のように述べている。

「過渡期を社会主義制度の勝利までとみるのは、国内的にはくつがえされた搾取階級の残存分子との階級闘争をやめ、国際的には帝国主義と平和的に暮らしながら世界革命をやろうとしない思想観点からでたものです。」(同上)

主席は次に、過渡期を共産主義の高い段階までとみるだけでなく、一国では共産主義を実現することができないとする一部の左翼的見解をとりあげ、このような主張によれば、「過渡期」は何ら「過渡期」ではないことになってしまおうとして、「かれらは世界革命が完遂されてこそ、はじめて共産主義に移行することができるというのです。こうした見解によれば、世界革命が完遂されるまでは過渡期がおわらないことになります」(同上)と批判している。

主席は次のように述べている。

「われわれが過渡期とプロレタリアート独裁の問題をこのようにみるのは、決してマルクス・レーニン主義を修正することになりません。われわれの立場は、マルクスやレーニンが書きのこした命題をあたらしい歴史的条件とわが国の具体的な実践に創造的に適用しようということなのです。こうすることが、教条主義と事大主義に反対し、マルクス・レーニン主義の純潔をまもる道だと考えます。」(同上)

以上で考察したように、資本主義から社会主義もしくは共産主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題は、主席によって朝鮮革命の具体的な諸条件のなかで正しく解明されたが、ここにも私たちは、主席がマルクス・レーニン主義の原理・原則を正しく継承し、独創的に自国の革命に適用する模範をみることができるのである。

4 過渡期の社会主義社会と完成した社会主義社会

金日成主席は、資本主義から完全に勝利した社会主義にいたるまでの、共産主義の低い段階としての社会主義は、まだ過渡的性格をもつ過渡期の社会主義であると、『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』のなかで述べていた。

では、この過渡期の社会主義とは、どのような社会であろうか。

金正日書記は次のように述べている。

「社会主義革命の勝利と社会主義制度の樹立は、労働者階級の革命闘争、社会主義・共産主義偉業の遂行において歴史的転換となる。しかし、これは決して革命の完成を意味するものではない。

社会主義制度が樹立されれば階級的対立は除去されるが、階級的差は残るようになる。社会主義社会に残る階級的差は友好的な二つの基本階級である労働者階級と農民との差であり、これは社会主義的所有の二つの形態である全人民的所有と協同的所有との差にもとづいている。

また、社会主義制度の樹立によって、労働の性格が根本的に変わり、労働は榮譽あるものと

なるが、まだ労働が生活上の第一義的欲求とはならず、労働の差が残るようになる。社会主義社会における労働の差は、主に肉体労働と精神労働、重労働と軽労働、工業労働と農業労働の差に現われる。

社会主義制度が樹立されれば搾取と貧困の根源は最終的に一掃されるが、社会構成員間の物質・文化生活水準での差は残るようになる。

社会主義社会に階級的差をはじめ各種の差が残る原因は、旧社会の遺物である思想、技術、文化の立ち遅れにある。社会主義社会は、こうした思想、技術、文化の立ち遅れと階級的差など各種の差によって、共産主義の高い段階とは区別され、過渡的性格をおびる。』（『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高く掲げて進もう』）

ここで書記が述べているように、資本主義から共産主義への過渡期の社会主義は、

- ① 階級間の敵対的対立はなくなるが、まだ労働者階級と農民の差が残っており、
- ② 労働の性格は、資本主義のもとでの労働とは根本的にちがうが、しかしまだ肉体労働と精神労働、重労働と軽労働、工業労働と農業労働の差が残っており、
- ③ 搾取と貧困の根源は一掃されているが、まだ社会構成員のあいだの物質・文化生活水準の差が残っている社会である。

そしてこれらの差が残る原因は

- ① 二つの基本階級、すなわち労働者階級と農民の差が残存しており、
- ② 旧社会の遺物である思想、技術、文化の立ち遅れが残存しているためである。

それゆえ、農村の後進性をなくし、協同所有を全人民的所有にかえ、あらゆる階級的差異のない無階級社会を実現し、思想、技術、文化の立ち遅れを克服しなければ、完全に勝利した社会主義、完成された社会主義を実現することはできないのである。

では完成した社会主義とはどのような社会であろうか。

それは過渡的性格が完全に克服された社会主義である。

金日成主席は、労働者階級が政権をにぎったのち、資本家階級を打倒して社会主義革命をおこなったからといって、完全な社会主義社会が建設されるのではない、として完全な社会主義社会について次のように述べている。

「それゆえ、われわれはいまだかつて、社会主義制度の樹立をもって社会主義の完全な勝利だといったことはありません。

それでは、完全な社会主義社会はどのようなときに実現されるのでしょうか？

社会主義の完全な勝利は、労働者階級と農民との階級的差異がなくなり、中産階級、とくに、農民大衆がわれわれを積極的に支持するようになってはじめて達成されるのです。農民が労働者階級化されるまでは、かれらがわれわれを支持するといっても、それは確固たるものとはなりえないし、ある程度動揺性をまぬがれないでしょう。……

中産階級が動揺しなくなり、かれらがわれわれを完全に支持するようになるまでは、社会主

義が強固になったとはいえないし、社会主義が完全に勝利したとみることはできません。中産階層がわれわれを積極的に支持するとき、はじめてわれわれは社会主義を完全に実現したといえます。われわれが、社会主義建設を前進させて中産階層をわれわれの側に完全にかくとくするようになったとき、労働者階級と農民との差異をなくし、無階級社会を建設するようになったとき、資本主義から社会主義への過渡期の任務が遂行されたといえるでしょう。」(『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』)

主席は、さらに次のように述べている。

「完全に勝利した社会主義社会は、全社会が労働者階級化され、全人民が国家と社会の平等な主人として、自主的で創造的な生活を営む完成された社会主義社会です。

完全に勝利した社会主義社会は階級のない社会であり、社会の全構成員の完全な社会的政治的平等と裕福な物質・文化生活が保障される発達した社会です。

完全に勝利した社会主義社会は、社会発展の見地からみれば資本主義から社会主義への過渡期が終わり、共産主義の低い段階が完全に実現した社会であり、しだいに共産主義の高い段階へ移行する社会です。」(『社会主義の完全な勝利のために』)

主席がここで述べているように、完全に勝利した社会主義社会は、階級のない完成された社会主義社会である。

主席は、階級廃絶のもつ重要な意義を次のように述べている。

「階級的対立と階級的差をなくし、階級そのものを廃絶することは人民大衆の自主性を実現するための根本条件です。階級が生まれたときから人びとのあいだに支配と従属の関係が生じ、したがって自主性をめざすたたかいは、とりもなおさず階級的解放をめざすたたかいとなりました。

しかし過去の歴史的時期、どの階級も階級廃絶のスローガンをかかげることができず、ひとり労働者階級のみが歴史舞台に登場した当初から階級廃絶のスローガンをかかげ、無階級社会の建設をめざしてたたかってきました。階級の廃絶と無階級社会の実現、これは労働者階級自らがうちだした歴史的課題であり、社会主義・共産主義建設の重要な目標であります。」(同上)

以上でみたように、完全に勝利した、完成された社会主義社会とは、

- ① 労働者階級と農民の差がなく、全社会が労働者階級化された社会、
- ② 社会の全構成員が完全な社会的政治的平等を保障されている無階級社会、
- ③ 中産階層の完全な支持をうける社会、
- ④ 社会の全構成員が裕福な物質・文化生活を保障される社会、である。

ところで、過渡期について、これまで「資本主義から社会主義への過渡期」という表現と、「資本主義から共産主義への過渡期」という二つの表現がなされていた。

金日成主席は、「資本主義から社会主義もしくは共産主義への過渡期」とも述べている。

このことについて、主席は、「われわれは、過渡期を資本主義から社会主義への過渡期とよ

んでもよく、資本主義から共産主義への過渡期とよんでもかまわないと考えます。なぜなら社会主義というのは共産主義の第一段階であるからです」と『資本主義から社会主義への過渡期とプロレタリアート独裁の問題について』のなかで述べている。そして「過渡期の問題にかんする論争の重点は、社会主義への過渡か、共産主義への過渡かという術語にあるのではなく、過渡期の界線をどこにひくかということに帰着します」（同上）と指摘している。

したがって、過渡期の界線をどこにひくかによって、「資本主義から社会主義への過渡期」または「資本主義から共産主義への過渡期」という場合の、社会主義と共産主義とが、どのような社会主義であり、どのような共産主義であるかが、明らかとなるのである。

過渡期を左翼的にみる見解は、資本主義から共産主義の高い段階までを「過渡期」とみているのであり、これに対し、右翼日和見主義の見解は、「過渡期」を資本主義から社会主義政権の樹立まで、とみているのである。

金日成主席は、「過渡期」を「資本主義から無階級社会（完全に勝利した社会主義社会）まで」と規定したのである。

したがって「過渡期」を理解するにあたって、社会主義か共産主義かという術語から理解するのではなく、あくまでも過渡期の境界線をどこでひくのか、という点から理解すべきなのである。

過渡期の社会は、資本主義と社会主義・共産主義という二つの性格をもっている。したがってそこでの分配の原則も、物質的刺戟の原則と道徳的刺戟の原則を組み合わせたものとしなければならず、どちらか一方の原則により、他方の原則を否定してはならない。しかし、過渡期の社会主義社会の本質は、あくまでも、社会主義・共産主義社会だということにある。

金正日書記は、このことを次のように述べている。

「もちろん、社会主義社会の過渡的性格はその本質的特徴をなすものではない。社会主義社会の本質的特徴は、あくまでもその共産主義的性格にある。それは社会主義社会が集団主義にもとづき、同志的協力と団結が社会関係の基本をなしている社会であるからである。

社会主義社会を建設し完成させていく過程は、社会主義社会の共産主義的性格が強化され、その過渡的性格が克服されていく過程である。このことは、社会主義建設において社会主義社会の共産主義的性格とその過渡的性格をともに考慮に入れ、それに即応してすべての政策を実施することを求める。

社会主義社会の本質的優位性と特性からして、社会主義建設において勤労者にたいする政治的・道徳的刺戟の強化と物質的刺戟の適切な取り合わせ、共産主義的施策の積極的な実施と労働の質と量による社会主義的分配原則の具現、勤労者の自覚の高度の発揮と統制の正しい結合など、ある一面に偏重しない正しい政策を実施することが重要な問題として提起される。

もし社会主義社会の過渡的性格をないがしろにし、共産主義的性格を見たり、反対に共産主義的性格をないがしろにし、過渡的性格のみを見て政策を立てるならば、左右の誤りを犯す恐

れがある。社会主義社会の過渡的性格を克服して共産主義社会を建設するためには、思想、技術、文化の立ち遅れを一掃するための革命をつづけなければならない。』（『マルクス・レーニン主義とチュチェ思想の旗を高くかかげて進もう』）

ここに、社会主義社会の過渡的性格と、その克服のための、思想、技術、文化の三大革命のもつ重要な意義が明らかにされている。

おわりに

真の社会主義・共産主義社会は、政治権力と生産手段が社会的に所有されているばかりでなく、人民大衆が社会の共同の主人となっている社会である。人民大衆を社会の主人とせず、政府の要人や党の指導者が、人民大衆から遊離し、自己の私的判断で行動するなら、人民大衆の創造力を発揮して、社会主義・共産主義社会を成功裏に建設することはできない。

ソ連、東欧の社会主義失敗の歴史的教訓がまさにこのことを教えている。これらの諸国では、政治、経済、文化のあらゆる側面で、人民大衆に奉仕する、人民大衆中心の社会主義を建設するという、最も大切な原則が無視されてきた。帝国主義者は、この社会主義諸国のマイナス面を見逃すことなく、これら社会主義諸国の変質に成功したのである。

しかし、このことは「社会主義の敗北と資本主義の勝利」を意味するものではない。ブルジョア経済学者のなかからもそういう見解が出されている。

ソ連、東欧の社会主義の挫折は、それら諸国が社会主義の本質、すなわち人民大衆を社会の主人とすることをすてさったための結果である。つまり社会主義国を名のりながら、社会主義でなくなった結果である。

他方、勝利したという資本主義諸国では、数千万人の失業者をかかえ、貧富の差を国内的にも、国際的にも拡大し、あらゆる社会的犯罪を巻き起こし、末期的現象をみせている。

おもえば、利潤追求のための商品生産社会、資本の支配する資本主義社会が人類の理想社会でないことは、空想的社会主義者が早くから強調していたところである。そしてマルクスが指摘しているように、資本主義は必ず社会主義にとってかえられるのである。資本主義が資本主義である限り、その根本的矛盾は解消されず、生産と消費の矛盾はなくなるならない。

現代の資本主義の世界的不況はその証明である。資本主義はこれまで度重なる不況を経験してきた。そして、これまでそれをのりこえてきた。それは資本家階級の努力の成果ではあるが、それは人民大衆の犠牲によるものでもあった。かくして資本主義の発展につれて、全世界人民の苦悩は深化した。二つの世界大戦——資本主義諸国間の対立を基本とした戦争——を考えただけでもこのことはわかる。

したがって、今や資本主義を前提にし、資本主義の枠内で、人間の理想社会を考えることは絶対に不可能なのである。

にも拘らず、日本の場合を考えてみても、社会主義・共産主義をかかげるグループですら、資本主義体制を前提としてしか行動していないのである。社会主義・共産主義をかかげるなら、失業者の問題、浮浪者の問題を、国会で重要な議題として論議すべきである。だが、これまで、これを前面に提出した政党があっただろうか。景気対策、不況打開策については極めて多くの発言がある。それは何よりも財界の要求だからである。しかし、失業者や浮浪者、富者と貧者の格差、社会的弱者の救済などが、重要な案件として国会内で論議されたことがあっただろうか。

われわれは、今こそ資本主義を前提とし、資本主義の枠内でのみ考えるのではなく、社会主義・共産主義を視野におさめて活動した先輩に学ぶべきであろう。

(1994年3月9日)